

防災に資する「記念碑等」の意義と役割に関する研究

正会員 ○高野 俊英*
正会員 上山 肇 **

防災 記念碑 津波
災害文化 記憶 コミュニティ

1. はじめに

東日本大震災は、東北地方の三陸沿岸で未曾有の大津波による犠牲者を出した。この地方には、先人からの津波災害の「負の記憶」を継承する「記念碑等」が各地に残されていた。しかし、住民の防災対策や避難行動に必ずしも活かされなかったといわれている。

本研究では「災害文化」を風化させないために地域を担う人を育てる学校等と地域等との連携による新たな文化教育の課題を探ることを目的に東北地方の地震・津波災害の「負の記憶」を継承する津波石碑（以下、「石碑」）などの「記念碑等」を「災害文化」として考察している。

特に「災害文化」として地域に伝承されてきた「てんでんこ」などの命を守る「知」について考察することにより、地域の「災害文化」を象徴する「記念碑等」の意義と役割等を明らかにしている。

2. 記念碑の意義と役割について

2.1 「負の記憶」と地域の「記念碑等」について

本論での「負の記憶」とは、自然災害による人々の集合的記憶とし、「記念碑等」は、「災害文化」を象徴する痕跡や景観、モニュメント、博物館、伝承等を含む。

東北地方の石碑や伝承等を中心とした「災害文化」に関しては、それらの場所や空間等から防災に資する意義や役割について、片田⁽¹⁾や前林⁽³⁾、目時⁽⁴⁾、矢守⁽⁵⁾など多くの研究がある。

三陸の石碑の多くは、明治津波、昭和津波の到達地点などに東京朝日新聞義捐金で建てられた(表)。碑文には『すぐ高台へ逃げよ』『ここより下に家を建てるな』など津波災害の教訓が刻まれている。これらの石碑は犠牲者の鎮魂と後世の備えとして先人の願いがこめられた災害記録(災害史)でもある(写真1)。

最近の「記念碑等」については、東日本大震災で残った陸前高田の「奇跡の一本松」(写真2)や、各被災地の「震

災遺構」の保存や災害記録の収集が進められているところである。



写真-1 浄土ヶ浜の「昭和津波石碑」

写真-2 陸前高田の「奇跡の一本松」 (共に筆者撮影 2014. 11)

2.2 「記念碑等」の「負の記憶」の風化

石碑には、物理的にその意義や役割の限界があることを前林は指摘している。過去の津波災害(高さ)の経験を超えた場合(いわゆる想定外)や、都市化や過疎化などで石碑の維持ができなくなる場合、時間と共に世代が代わるごとに防災意識が薄れ忘れさられて放置された場合などの風化である。

また、人々の伝承も世代交代など時間の経緯とともに風化する。しかし、1896年(明治29年)の明治津波から1933年(昭和8年)の昭和津波まで37年を経過していたが、明治津波の経験者が昭和津波で未経験者を高台に避難させ被害は抑制された。だが、東日本大震災では、昭和津波から78年の歳月が流れ、経験者が高齢化し皆無に等しく、もし津波の怖さが地域の伝承として語り継がれていれば被害を最小限に抑えられ石碑等の警鐘が活かされたと考えられよう。

表 東北の津波石碑数調べ(出典: 国交省東北地方整備局⁽²⁾)

県名	明治津波(M29)	昭和津波(S8)	明治昭和津波	チリ津波(S35)	その他・不明	計(件数)
青森県	0	7	0	0	1	8
岩手県	113	83	11	8	10	225
宮城県	7	62	3	6	6	84
計(件数)	120	152	14	14	17	317

A study on the significance and role of "Monument" that contribute to disaster prevention

TAKANO Toshihide*, KAMIYAMA Hajime**

ところで、2014年11月に筆者が訪れた宮古市田老地区のガイドによれば、東日本大震災の前年、県外から当地に転入してきた住人が、2011年3月11日の2日前に起きた地震で高台に避難しなかったことを、近所の人に強く注意されたことで、今回すぐに避難して助かった話や、小学校前の石碑の教訓を生かした日頃の避難訓練で、児童全員がすぐ高台へ避難して助かった話を直接聞いた。

つまり、避難訓練等により伝承等が生活習慣として根付いていれば、地震による津波情報を的確に避難行動に結びつけ、避難行動を起こす強い動機になったと考えられる。

3. 「記念碑等」を活用するための仕組みの必要性

3.1 「災害文化」としての「津波てんでんこ」

「記念碑等」の伝承等に分類される「津波てんでんこ」は「命てんでんこ」とも称される。この伝承は、津波避難の鉄則のように見えるが、矢守によれば、次の4つの重層的な意義と役割を提示している。

第1は、自分の命は自分で守る自助原則。第2は、他者避難の促進。率先避難者が他者の避難行動をも促す共助。第3は、大切な人がお互いに「てんでんこ」することを信じる。この期待がなければ安心して自分だけ避難出来ない。そして第4は、生存者の自責感の低減。「てんでんこ」で大切な人を亡くした場合、その約束から、助けに行くのは望ましくない、期待していないという心理作用を通じて自責感をわずかでも緩和する。つまり、残された被災者が前向きに生きるための「知」である。

3.2 「津波てんでんこ」を生かした防災教育

片田などの釜石での防災教育では、保護者に「子どものことを信用して避難してほしい」というメッセージを日常的に発信し、親子の相互信頼を醸成し、犠牲者をほとんど出さなかった。教育の現場でも「記念碑等」が伝える「負の記憶」を風化させないために日常的に繰り返し防災教育や避難訓練などを地域と連携しながら行う必要がある。なぜなら「負の記憶」は忘れたくない記憶である。

つまり、地域を担う人を育てる学校等と地域等が協力・連携して次世代を育成し、「災害文化」の継承と、防災に資する「街づくり」で地域の防災力の強化を図る必要がある。そこで片田などの「てんでんこ」を生かした、先人の「知」を取り入れた学校と地域等が連携した防災教育の新たな教科化を提案する。

4. 結論と今後の課題

「記念碑等」の意義と役割は、次世代の人々に忘れたころ（風化したころ）に来る自然災害に対する備えと、「災害文化」を育む学びの機会を提供する役割との、二つの社会的システムの必要性を明示していると考えられる。

つまり、新たな災害文化の「知」を育む文化の創生とそのための文化教育の必要性である。

また、東日本大震災での大きな被害で、顕在化したのは、「記念碑等」が伝える警鐘の風化が単に時間の経過による風化だけではなく、科学技術を過信して、想定外の災害を想定せず、思考停止し、災害対策が後手にまわり「災害文化」として熟成されてこなかったことも一因であるともいわれる。とりわけ、近年地域のコミュニティが果たしてきた人々の「安全・安心」を担う「街づくり」の「知」の絆が、過疎化や少子高齢化等により希薄化し、人々の災害の記憶の風化が進んだ。

今後それらの対策を考えていく上でも、「記念碑等」の「災害文化」を学ぶ教育と、その学びの場の醸成の方策、「記念碑等」の現状の活用等の調査を行うことにより、「災害文化」を「国民文化」に昇華・創造する新たな文化教育について考えていく必要がある(図)。

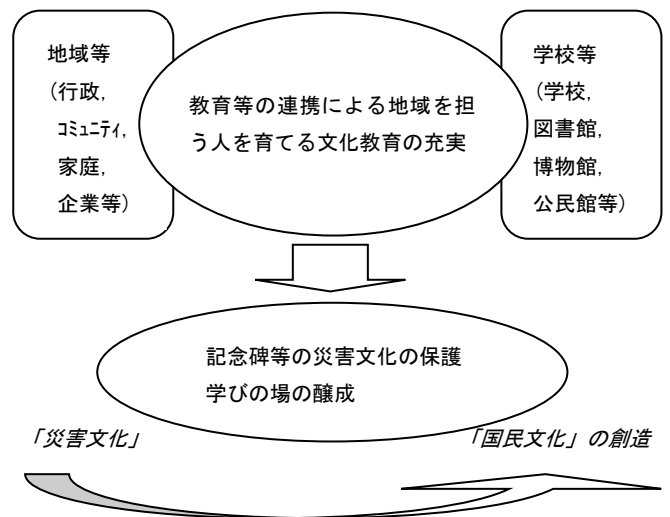


図 教育等の連携による新たな「国民文化」の創造

【参考文献】

- (1) 片田敏孝：『人が死なない防災』集英社，2012
- (2) 国土交通省東北地方整備局：『津波被害・津波石碑情報アーカイブ』，(2015年3月31日現在)
<http://www.thr.mlit.go.jp/road/sekijijouhou/archive/top.pdf>
- (3) 前林清和：「わが国における津波伝承としての石碑を問い直す」『防災における文化の役割－国際防災協力と災害文化の醸成』立教大学アジア地域研究所,2013年度第1回公開シンポジウム資料, 2013
- (4) 目時和哉：「石に刻まれた明治29年・昭和8年の三陸沖地震津波」『岩手県立博物館研究報告第30号2013年3月』, 33-45, 2013
- (5) 矢守克也：『巨大災害のリスク・コミュニケーション－災害情報の新しいかたち』ミネルヴァ書房, 2013

*法政大学大学院政策創造研究科 研究生 修士(社会デザイン学)

**法政大学大学院政策創造研究科 教授

博士(工学)、博士(政策学)

*Research student, Hosei Graduate School of Regional Policy Design,

Mr. of Business Administration in Social Design Studies

** Hosei Graduate School of Regional Policy Design, Prof., Dr. Eng., Ph.D.